一光が丘ー NEWS Letter
発行：公立大学法人福島県立医科大学
広報コミュニケーション室
Vol.145 2019年 3月 8日

患者さんに留まらず、そのご家族のケアも通して看護の素晴らしさを体感する

講座の今：看護学部　家族看護学部門
患者さんとそのご家族をともにサポート

部門長
教授
和田 久美子

「ふくしまの子どもの看護を考える会」の様子

家族看護における教育と研究

家族看護学は1990年代に日本に導入された学問です。家族の誰かが健康障害になると介護や付き添い、収入が途絶えるなど家族員にも多大な影響を及ぼすため、家族を単に協力者として捉えるのではなく、ケアの対象と捉えます。

家族ケアを学ぶと「家族に関る必要性はわかったが家族にどのように声をかけたらよいか分からない」という臨床の看護師は多いです。

学部教育では、前期で家族看護の基礎的な理解を行います。後期では、看護の現場で多く見られる事例検討を行った後、その事例の関わりをロールプレイでトレーニングをします。まだ２年生の学部生がみごとに、家族のアセスメントを行い、関わる技術を修得していきます。

研究は“家族看護学を学んだ看護師の家族の捉えかたに現れる特徴”（2015）、現在は“福島県における訪問看護の現状と課題”に取り組んでいます。本学に赴任後から、病院では必ずしも家族の方に会えるとは限らないため、訪問看護で実習させて頂いてきました。家族（患者含む）を理解することが主目的の実習ですが、初めて病院から在宅に出て訪問看護の看護師の素晴らしさに感動する学生は多いです。これを最後の取り組みと考え研究をしています。

小児看護学領域の活動

小児看護学領域では、子どもが持つ力を発揮できるような看護を目指しています。本年２月より「ふくしまの子どもの看護を考える会」を立ち上げ、地域の皆様と一緒に子どもの看護を考えていく活動を行っています。また、それぞれの臨床経験を基に、〈グリーフワーク・サポートに関する研究〉、〈「子どもの手術時の保護者同伴入室を導入し継続するプロセス」、「NICU看護師の家族とのコミュニケーションと退院支援に関する教育プログラム」への取り組み〉、〈闘病中の子どもや家族のためのファミリーサポートハウスである“パンダハウス”の活動への参加〉、〈青年海外協力隊の経験から興味をもった小児看護教育への取り組み、たいせつな人を亡くした子どもと家族をサポートする活動への参加〉など、子どもの看護に関連したことに取り組んでいます。

精神看護学領域の研究活動

精神看護学領域は、大川貴子、佐藤利憲、田村達弥、吾妻陽子の４名が所属し、加藤郁子精神看護専門看護師（基礎看護学部門）と共に研究活動を行なっています。研究として取り組んできたことの１つには、精神科の看護師に対して、アサーショントレーニングを行い、それによって精神障害者の地域移行を促進するような看護活動が行なえるようになるのかを検討する研究があります。アサーションとは「さわやかな自己表現」と訳されていますが、自らの考えや思いを率直に、かつ、他者の権利を侵すことなく表現することを意味します。地域移行を促す看護活動の中でも、特に家族に対するアプローチができるようになることが、明らかとなりました。現在は、看護師が“リカバリー”志向になるような介入プログラムを作成し、そのプログラムに参加した人の変化を検討しています。このような研究活動を通して、臨床の看護師さんと連携を図りながら、精神障がい者が地域でその人らしい生活が送れることを目指しています。

精神看護学の研究メンバー（研修テキストを手に…）

本学2例目の大学発ベンチャーの称号を授与

本学は、平成31年2月28日、本学の教員が起業した企業に対して、「福島県立医科大学発ベンチャー」の称号を授与しました。「大学発ベンチャー」とは、大学の教員、研究者、学生が、開発した技術を用いて事業化する企業のことを指し、今回の称号授与は、本学にとって2例目となります。

称号を授与されたのは「エースバイオアナリシス株式会社」（本社：福島市）で、医学部自然科学講座 先端化学分野 志村清仁教授が代表取締役を務めます。同社はタンパク質の電気的な性質の違いを迅速に分離分析する特許技術を用いた装置とこの装置に使用する試薬や消耗品の開発、販売を事業とします。

この技術は、抗体医薬などの組換えタンパク質の開発・生産、ドーピング検査、新規バイオマーカー開発など幅広い分野への適用が見込まれており、従来の装置に比べ分析時間を1/10に短縮できるほか、自動化も図れることから、タンパク質分析の新しい基盤技術として世界中で使用されることを目指します。

なお、当該装置の製造は、特許権の共有者である日栄工業株式会社（福島市）が行い、福島の産業復興への貢献も図ってまいります。

左から竹之下理事長、志村教授、安村理事（教育・研究担当）

災害・被ばく医療科学共同専攻(修士課程)院生が ロシア国立メーチニコフ北西医科大学の単位を取得

災害・被ばく医療科学共同専攻(修士課程)1年生の孔 秀和さん、高野 吉教さんの２名が、長崎大学の修士学生８名とともに、平成31年１月24日から２月４日まで、ロシアのサンクトペテルブルグ市にある国立メーチニコフ北西医科大学に留学しました。

北西医科大学では「医療生物統計学」を受講し、単位取得証明書が授与されました。これは海外大学との学術交流では初めてとなる取組で、今後本学の科目と単位互換する予定です。

留学に当たっては、英語や基礎的なロシア語とともに、医療生物統計学(入門編)、ロシアの文化や日常生活を勉強して臨みました。孔 秀和さんは病院で放射線技師として、高野 吉教さんは消防署で救急救命士として働きながら共同大学院で学び、修士課程１年目にして海外の大学で単位を授与されました。

災害・被ばく医療科学共同専攻(修士課程)は平成28年度から本学と長崎大学が開設した大学院です。被ばく医療学、放射線リスク学で実績を持つ長崎大学と東日本大震災を経験し災害医療分野で実績を持つ本学が、それぞれの大学の特徴を活かし、被ばく医療科学分野に精通し、今後起こり得る複合災害に対応できる人材を育成しています。